

手習・夢ノ浮橋私見

久保重

源氏物語の完結・未完結については、それぞれ従前から論ぜられて来たことだし、浮舟の還俗論・非還俗論や、後人の手になる続篇的作品（例えば古本「山路の露」等）の存在なども、この物語の未完を前提としていて、と思えるので、事新しい問題ではないが、私は私なりに、源氏物語は「夢ノ浮橋」の巻で完結しているのではないと考えるものである。

「夢ノ浮橋」の巻の終りは

「いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくてかへり来たれば、すさまじく、なかなかなり、と思すことさまさまにて、人の隠しするたるにやあらむ、と、わが御心の思ひよらぬ限なく、落しおき給へりしならひに、とぞ本に侍るめる。」（日本古典全書「源氏物語」七 以下引用本文は同書による）

とあつて、一巻の終結の形式をとつている。異本にあたつても「とぞ」・「とぞ本に侍る」と、それぞれ区劃意識を示している。「とぞ本に侍るめる」「とぞ本に侍る」というのは、強い明確な区劃意識が見られる文章であるが、それだからと云つて、この言葉が直ちに物語全篇の完結を示しているとは断じ難い。物語の完結には、構想の完結が伴わなければならないまい。少くとも、重要な主題を未解決のまま、抛棄するわけには行くまい。そういう内容上の完結が証かされない限り、この句は単に原本の末尾を示すに過ぎない。

この「夢ノ浮橋」の巻の終りの部分は、すぐ前の「手習」の巻の巻末、

「さすがに、その人とは見つけながら、あやしきさまに、容貌ことなる人の中に、憂きことを聞きつけたらむこそいみじかるべけれ、と、よろづに道すがら思し乱れけるにや。」（この末尾は、異本では「おぼしみだれ

手習・夢ノ浮橋私見

けるとや」「おぼしきみだれけるとぞ」となっているが、何れも意味上の大差はなく、「夢ノ浮橋」の巻の末尾程強い形ではないが、みな巻尾の区劃を見せている。と内容が非常によく似ている。前者は「薫は浮舟の許に、浮舟の弟小君を使者として、横川ノ僧都の文を添えて薫自身の消息を届けさせたのに、小君が空しく帰つて来たので、誰かが浮舟を隠し据えているのだらうと思つた。」後者は「小野の尼僧庵の中に、浮舟の居るのを確認しながら、浮舟には男が通つてくる、という厭やな噂を耳にでもするのだつたら、自分は、つらいことだらうと、薫は様々に心が乱れた。」という意味である。

実は作者は「蜻蛉」の巻後半以後、句を三角関係の一角の位置からすでに外すしてしまつたのだが、薫は彼が圏外に去つたことを知らない。句宮をも含めて「さまざまに」、浮舟を隠し据えている男を、想像しているのである。「手習」の巻は、薫が浮舟の生存と出家の噂の出所である横川ノ僧都について、直接に真相を確かめようと比叡に登る道すがら。夢ノ浮橋の巻のは、その翌日、事実を確認した上で、薫が小野の浮舟の許に送つた文が、「所違へにもあらむにいとかたはらいたかるべし。」と受取られなかつたと知つた後。二巻とも、薫が浮舟の生存と出家とを知つたが、まだ顔を合はすに至らず、ひよつとすると浮舟には自分以外の男が介在しているのではないかと疑っている状態である。

「夢ノ浮橋」の巻末で源氏物語は完了したと見る人は古来多い。池田亀鑑博士も「作中人物の運命に決定的な結末をつけないで筆を擱く、五十四帖の巨編を終へるに適はしい筆致といふべきか」(日本古典全書(源氏物語七頭註))と云つてゐるが、私には何としても、上掲「夢ノ浮橋」巻末の文章で、源氏物語が完結したとは考えることが出来ない。「手習」巻の終りと、「夢ノ浮橋」の巻の終りとは、共に、薫が遅疑している状態を書いている。両時点の間で、浮舟の、自分を現状のままそつとしておいてほしいといふ念願に変化はない。視点を中心人物の二人に限ると、その距離は謎を残して停止したまゝで物語は進展を鎖ぎすかの如くである。然し、これとは別にこの二つの時点の間に、横川ノ僧都の浮舟に与えた文が加つて来る。その内容は私の見る所では軽視することを許さない性質のものである。後に詳述したい。

打ち続く二巻が全くよく似た形で筆をとめられて、一組の男女の交渉が停滯したまゝ放置されている——こんな場合、作者は何を意図しているのだろうか。両巻の中、後の巻が前巻に付属した小品であつた場合、それは一つの構想が終末した後の「余情の巻」をなすであろう。「総角」の巻と「早蕨」の巻に見るように、余情の巻をつける手法を、作者は時々用いてそれぞれに効果を上げてゐる。然しこの場合は、出家した浮舟に寄せる薫の未練と疑心とを、繰り返えし述べて、終結の「余情」と成してゐるとは私は思わない。「夢ノ浮橋」の巻の僧都の文を重視するからである。僧都の文を起点とする展開、「つゞき」を期待させるところの暗示的巻末と見るのである。この種の暗示的な巻末は、この両巻に限らずこのあたり、殆ど毎巻常套的手法になつてゐる。そこに読者群の存在を感じさせられるのだが、こゝで作者が、思わせぶりを二回重ねて、読者を待たせてゐるのは、次に重大な進展を打出して来る準備の様に、受取れるのである。美女の出現、愛慾のもつれ、女の入水の決意、失踪、救出、出家、男の一人と再会する予感と、頗る能率的に進展して来たストーリーが、ここで終結したら、「二人の男に同時に愛された女人の物語」の解決にはなるだろう。然しわれわれが「橋姫」の巻から、読んで来た印象では、この物語は、複数の愛の成り行きや、貴族間の恋の風情や、宮廷周辺の男女の美的情緒の紹介などを、目的にして形づくられた物語とは、思えないふしがある。作品の中で或る思考を、究極まで追求しようとする作者の意慾が見え、周倒に計算し企劃された形象化がある。つまり知的な創作意識が想われ、その又背後には、或る未知の結果を期待している、深い大きい叡知が存在しているのが、感じ取れるからである。

たとえば、浮舟を描き上げて行く能力一つを取り上げて見ても、趣味的興味くらいで成つた作品とは、どう考へて見ても思われたいではないか。ブラツクの「感覺は変形し精神は形成する。」という有名な言葉は絵画について言われたものであるが、これを借ると、この作品の原因は、作者の精神である。薫を産み浮舟を産み、もつと前、八ノ宮、大君、中の君等を産んだ精神を、私は想像せずにいられない。暗く結ばはれ、そして執拗なまでに強い人間の自尊心を持つた、一個の精神——作者に思ひ至るのだ。この人の気の昂ぶりが才三部の「原因」である。これに形象化が加えられたのである。作者が才三部で追求しているもの、或は完成しようとしているもの、

手習・夢ノ浮橋私見

それは何なのだろう。一体に優れた作品は独自の世界を形づくるものである。源氏物語は才一部・才二部・才三部がそれぞれ特異の世界を創り出して、それぞれの秩序を有つた小宇宙の趣きがあり、その魅力が今日まで読者を惹き付けているのであるが、才一部は「藤ノ裏葉」の巻の豊麗なフィナーレの姿に、まことに物語的な主題の完成を見せて終了する。才二部は光る源氏の死の暗示という大きな解決を有つ。これら終末が、それぞれ才一部、才二部を総仕上げしている。その様な意味に於いて、「夢ノ浮橋」の巻末は、才三部を完了するものである。答えは「否」である。

元来、源氏物語の各巻の末尾の形は、様々で、一定した形はない。また、才一部、才二部の末尾も、左の通りで、特別の形をとっているのではない。

「唱歌の殿上人、御階に待つ中に、弁の少将の声すぐれたり。なほ然るべきにこそ見えたる御中らひなめり。」（藤ノ裏葉）

「親王たち大臣の御引出物、しなじなの祿どもなど、二なうおぼし設けてとぞ。」（幻）

だから一卷の終末の形として、「夢ノ浮橋」の末尾は、何ら問題を残すところはない。然し、宇治十帖の終末・才三部の終末・源氏物語全篇の終末としての、意味内容を備えていない点で、構想の完了を主張する力に欠けていると見るのである。人物の運命に決定を与えないで終つたとすると、尚更、その様な解決方法は当時の物語の中に類例を見ない新機軸を成すものであるだけに、読者に対して、構想完結の強い主張力を持つことが、必要であると思われる。それは、暗示的になされても亦、効力は同じであつた。然し、「夢ノ浮橋」で終結したものは、浮舟と薫と匂との物語、或いは浮舟物語であつた。若しこれで橋姫以降の所謂宇治十帖が完結したと見るならば、宇治十帖は、大君物語、中の君物語、浮舟物語の三部を、羅列的に連結した物語となり、薫は、女君を、次々に女主人公に仕立てる為にだけ、席を与えられた傍役と、解しなければならなくなる。成程、八ノ宮の三女子が、薫から愛を求められる時期も、物語の中心興味の地位を占める時期も、この順序で並んでやつて来る。然し、薫は、女主人公の紹介者として設定された訳ではない。「愛の遍歴者」でもない。彼は最初、若き求

道者として登場した。彼に課せられた課題は、才二部を承けた、多分に思想的なものであった。それは彼が、仏道を何時どのような具合に成就するか、という点にかかつていた。それがいつしか大君への思慕にかわり、大君の死後は、出発点の道心とは背馳した方向に大君の面影をもとめてさまよう。彼の負っている課題はどんな形で解決するのか。その片鱗さえも、まだわれ／＼は示されていない。

又、大君・中ノ君を描く時に、浮舟を描く時に、作者が、常に何かしら思いあぐねているものをわれ／＼も感じた。それが、宇治の巻々の特色であった。われわれ読者は、登場人物の運命を作者と共に辿りながら、作者の魅力的ないくつもの思索の帰結に、期待をかけて来たのだった。更にまた、「匂宮」・「竹河」・「紅梅」という序の部分に対応するだけの、「才三部」の大きな屋台骨は、どこで振り落されてしまったのだろうか。そして又、究極的には、「光る源氏の物語」は、これで完了しているのだろうか。古女房達によつて光源氏的美貌が追懷されたり、薫が女三宮への孝養を口にするあたり、「手習」の巻から、ぼつぼつ全篇五十四帖の大團圓に近づいたことを、読者は知らされる。終末が近いことは確かである。けれども、夢ノ浮橋を読み終つて、暗示的にでも全構想にわたる完結の予感が、与えられたであろうか。少くとも、宇治十帖の世界を形成して来た独得の主題が、解決を与えられたであろうか。われわれは否というより外はない。

才三部は筋の運びが優先している観があるが、緊迫した筋運び自体が追及している何か、——近代小説に似ているとよく言われる所以の主題の存在があつた。作者は思うところありげに、人の身の上の「いふかひなさ」を意慾的に洗ひ上げて、見せて来たのだった。人物の出現、除去、事件の起伏が、目を見張らせるばかり見事に敷置されてゆく。水際立つた構成に満足しつつ、読者は、構成全体が指向する「思考」に、興味を傾けて、作者に従いて来たのだった。それなのに、こゝまで来ると、急にその究極的な中心興味が取り去られてしまい、肝腎のそれは何だったのかさへ、不明になってしまう。全構想を明かにして一篇を完結する部分が欠けているのである。私は、宇治十帖はダイジェストか、という見解が生じたのは、当初の橋姫以来の一切の筋の流れを、当然容れ収めるだけの決定的構想を、最後に於いて欠いているところに、原因があるのではないかと思つている。そして

手習・夢ノ浮橋私見

その決定的構想が、最後に書かれる筈だったのだと考える。もともと「人」とその周囲、「人間」を描いたという根本の性質上、源氏物語の末尾は、永遠の未完であるかも知れない。然し「夢ノ浮橋」の巻尾を以つて、これだけの思考を産んだ精神が眺めた「永遠の未完」とは信じ難いのである。

さて、結論を先きに云うと、私は才三部の始動となり、やがて薫一人に負担させられて行く道心と愛執との課題の解決が、遠く才二部を承けて最後に来て、それが、「竹河」「紅梅」「匂宮」三巻を序に持つて、展開して来た才三部、「源氏の御族の物語」の完結となり、同時に、源氏物語全篇の意味も亦、完成するところだったのだらうと、推測するものである。今まで読んで来た通り、このすぐれた作品に於いて、もとより理念が独走する筈はない。そこにどの様な文学的形象化が見られるはずだったのか——見果てぬ惜しい夢である。然し、若しこの後に新たな展開が考えられるとすれば、その契機をなすものこそは、「夢ノ浮橋」の巻の横川の僧都の文だろうと思うのである。

僧都の文は次の通りである。

「今朝ここに、大將殿ものし給ひて、御ありきまたづね問ひ給ふに、はじめよりありしやうくはしく聞え侍りぬ。御こころざし深かりける御中を、背き給ひて、あやしき山がつの中に、出家し給へること。かへりては、仏の責め添ふべきことなるをなむ、うけたまはりおどろき侍る。いかがはせむ。もとの御契あやまち給はで、愛執の罪をはるかしきこえ給ひて、一日の出家の功德は、はかりなきものなれば、なほ頼ませ給へ、となむ。ことごとには、みづからさぶらひて申し侍らむ。かつがつこの小君聞え給ひてむ。」（夢ノ浮橋）

この僧都の文については、古註以来還俗を勧めるものと見る説と、還俗を勧めるものではないと見る説と、二つに、解釈の方が別れるのであるが、上の文をこの一点だけにしばつて読むと「もとの御契あやまち給はで」というのは「薫との前世からの宿縁を、浮舟が勝手に変更したりせず、元々通り夫婦の間柄になつて」の意、「愛執の罪」は浮舟が出家したのを惜しく思う心を他が起すのを仏に対する罪惡と見て云つたもので、「晴るか

し聞え」とあるから、「愛執の罪を薰が心中に犯すのを浮舟が晴らして差し上げるように」と云っているのである。「一日の出家の功德は量りなきものなれば。」は河海抄に「心地観経曰、若善男子善女人、発阿耨多羅三藐三菩提心、一日一夜出家修道、二百萬劫不墮惡趣」とある。「菩提心を発として、一日の出家をした人は、永久に地獄に落ちることはない、無量の功德を積むものであるから。」の意である。ここを多屋頼俊氏は、「本文にわ『一日出家の功德は、はかりなきものなれば、猶たのませ給へ』とある。これわ一般的に『出家の功德』の偉大さお説いて、其に信頼し給えと云つただけであつて、浮舟個人の『出家遊ばした功德お言つたのでわなく、いわんや『還俗』などと言うことわ本文にわ全く無い事である。そもく『出家』とゆう事わ、菩提お成ずるための手段であつて、髪を切り法衣おまとうとゆう事柄にわ、格別な意義があるわけでない。断ち難い恩愛の情お捨て、人間の、この世的な欲望お悉く捨て、」「この世には亡き人と同じやう（夢の浮橋）」になつて、専心に仏道を行じようと、決意し実行すること、深い宗教的価値お認める、とゆうだけである。ところで一日一夜出家得道、二百万劫不墮惡趣とゆう程に尊い出家の道お誘惑してこれお廃棄せしめるならば、その廃棄した当人も、廃棄させた人も手引おした人も、ともに無量の罪に該当するであらう事わまた自明の事でないならぬ。『（一日の出家の功德わ無量である。あなたわ出家してもう九ヶ月になつてゐる。無量の功德わ、その又何百倍にもなつてゐる筈だから、この辺で破戒しても、未来は大丈夫です）とゆうような低級愚劣な算盤勘定お、いくら「物語」でも学徳兼備の横川の僧都にさせる筈わないのである。』（源氏物語の思想」二七〇頁）と云つてゐる。一日の出家の功德は無量というの是一般の意味であつて、浮舟個人の功德を云うものでないという見解に私も賛成である。「なお頼ませ給へ」は、僧都が浮舟に「仏の慈悲を信頼せよ」というので出家の功德に信頼せよという意味ではなからう。本来「出家」は仏の栄光に人間が寄与する性質のものでない。生身の人間にはその様な能力はあるまい。「なほ」と云つたのは「事態がどうなろうとやはり」の意である。僧都の文は浮舟に対する同情に充ち、周倒に進むべき道と頼むべき目標とを指示したもので、まことに「みちびく」というのはこういうことをこそ指すのだと思わせる。多屋氏は上掲の著書で「浮舟尼わ大将との關係の復活など

手習・夢ノ浮橋私見

夢にも願っていない。大将も浮舟尼を破戒させようなどとわ少しも考えていない。そして僧都わ、万一にも破戒とゆうような事になつてわ大変だと思つて、十分に考慮お廻らし、その危険がないことを確かめた上で、紹介状を書かれたのである。その最初の紹介状に……男の愛着が深いようだから、もとのように夫婦になつて……戒お破つてもかまいませんよ……などと書くことわ到底ありうべからざる事である。横川の僧都が若しもこんな手紙を書いたとするならば、この物語は支離滅裂なものである筈である」(同上、二六八頁)と、僧都は還俗を勧めているのではないと解している。僧都の手紙が指示しているものは、言葉通りに解釈すると「薫と復縁してその愛執の罪を晴らす様に。相変らず仏の慈悲を信賴するがよい。」となるのであるが、多屋氏が云うように僧都は何人に対しても破戒を容認する筈はない。薫と浮舟が「もとの御契り」に復することを破戒と僧都は見ないのである。そこに問題があるが、これに就いては後に詳しく考えたい。

薫が、この時、これは直接浮舟に渡すようにと命じて、小君に持たせて来た消息は次の通りであつた。

「さらに聞えむ方なくさまさまに罪重き御心をば僧都に思ひゆるしきこえて、今はいかであさましかりし世の夢語をだにといそがるる心のわれながらもどかしきになむ。まして人目はいかに」(夢ノ浮橋)

文末に歌が記されている。

「法の師と尋ぬる道をしるべにておもはぬ山にふみ惑ふかな」

例の、きまじめな薫の手紙の書きぶりである。「さまさまに罪重き御心」というのは、浮舟が匂宮と交渉を持つたこと、薫が京に迎え取るのを目の前に控えての失踪、無断で出家してしまつたことなどを指しているのであらう。それを僧都に免じて許すと云つていたので、そのあとの文章は和歌をも含めて愛情告白である。薫が今までの浮舟の心の光景を何一つ知っていないこと、又知ろうともししていないことが、これでよくわかる。その愛情告白も云わば自己本位の性質のものである。光る源氏なら決してこうは書かなかつたにちがいない。最初浮舟は安住の部屋さえない寄るべなき身として登場し、晩秋の一夜、薫に宇治の院に連れられて来たが、翌年の正月過ぎ

まで、明けても暮れても雪と氷にとざされた生活で、薫の訪れもない。匂宮に不意を襲われる。おどかな一方の彼女は、運命に抗がうすべを知らなかった。右近も侍従も女房達は誰一人として、力にならない。母と乳母は何も知らない。彼女はひとり、薫と匂との間に心身をひき裂かれる。最終段階まで運命に追いつめられた彼女は恐怖と絶望のはて、死に免れる外に道がなかったのだ。事態は匂と薫の性格が原因となつて起つたので、被害者は浮舟である。葬式の後で、薫は事の責めは浮舟をなぐらく打棄てゝおいた自分であると反省したが、それは「事」を理解したので、運命の鉄の爪に掴まれた浮舟が、日夜経験した「心」、深刻な孤独感や絶望感について、終いに思い至らなかつた。わざわざ宇治に赴いて「見し人は影もとまらぬ水の上に落ち添ふ涙」と浮舟をいたみ、法要を営んだり親兄弟を顧みたり、まことに「誠実の人」であるが、薫は所詮雲の上人なのである。だから出家した浮舟に「若しや通う男があつたら」などと想つたり出来るのである。そもそも浮舟を宇治の川べりの院に何ヶ月も打棄てておいたのも、彼のこの人となりが原因である。薫のこういつた自分の立てた計算だけしかわからない性質が、浮舟物語前半の展開をたすけたのを見逃がす訳には行かない。

さて僧都の一行に救われて、小野の尼僧庵に住む浮舟は、京の貴族社会の生活とは、自分は全く関係のないもの、と思う人に成つてゐる。長谷詣でに誘う尼君に同行を拒むのは、仏に祈ることを棄てたのではない。現世に失望し、現世利益をもはや必要としないのである。こうして彼女の願ひは、専ら来世極楽往生に向う。彼女の内部生活の、この転換を無論薫は知らない。彼女の生命を救うのに力をつくし、今は生活上の庇護者である、尼君の愛情も、所詮は自己本位のものだし、尼僧庵の生活内容も、俗世と何ら変るところはない。浮舟は、ここでもやはり孤独である。作者は、尼のかつての女婿であつた中将が、彼女に求婚するという事態を、自然発生的に導き入れて来る。浮舟は僧都に願つて出家する。

『うれしくもしつるかな。』とこれのみぞ生ける験ありて覚え給ひける。』〔手習〕

経文を読み、勤行にはげみ、時に尼僧達の遊戲に加わり、彼女は、登場以來始めて活き活きとした表情を見せる。然し、若く美しい女に世の中は苛酷である。出家したからとて、身の安全の絶対的保証はない。あるじの尼

手習・夢ノ浮橋私見

は勿論、侍女の尼達・女の童までが、中將の恋に同情的で、事態は却つて予断を許さぬ方向に向う。一方尼の甥、紀守によつて、薫の噂がもたらされて来る。これを手はじめに、次才に浮舟に加えられる俗世的圧迫を、作者は巧みに積み重ねる。遂に薫が登場する。僧都が薫の姉、明石ノ中宮に浮舟の噂をし、中宮が小宰相に命じて薫の耳に入れたのだ。この辺り水も洩らさぬ筋運びである。薫が浮舟の救世主として出現したのでないことは、上に掲げた彼の消息で明白である。彼は、浮舟を「自分の女」としてしか見ていない。京へ聞えるのを恐れて、僧都にも尼君にも、ひた隠しに隠して来た身の上が、一たまりもなく明白になつた今は、浮舟自身の意志や希望など、問題にもならないことは、中將の場合の比ではない。その時、僧都の文が浮舟に与えられる。薫が現れて身の上が僧都や周囲にわかつてしまつたことは、浮舟にとつて大きなショックであつたし、事実また事態が急転することは否めない。文だけでなく、数日後対面の上で、僧都は、彼女の今後の進路について話そうと書いている。僧都の示す方向は、その文に見られる通りであることは明白である。解決は専ら薫の心一つにかかつている。

浮舟が後に薫と再会するか否かは不明のまゝで私には十分である。それよりも、浮舟が「手習」の巻で見せる信仰生活の姿勢の方に私は関心を持つ。春が訪れてもかき暗らし雪が降り、凍りわたつて流れの音さえ絶えたわびしさに、彼女はおのずと世俗生活の頃が思い出されてなつかしい。閑近く紅梅が咲くと、ふと匂宮や薫が連想される。母のことを聞かれると涙が落ちる。けれども、み仏に後夜の關伽をたてまつることは怠らない。信心清浄な生活である。これらは多分に絵画の様な美的情景を描く「物語」的意識が見える場面だが、一面、浮舟の心の深部の光景をも、示しているところである。大君の信仰には、何程か観念的要素が見られたが、ここに在るものは、いはば自然の生理と密着した性質の帰依である。よるべなさと孤独とを、身を以つて通過して来た彼女は、一心に、現世の苦しみを免れたいと願ひ、それ故、ひとえに仏に縋り、往生極楽國をあこがれるに至つてゐる。彼女が、仏をたのみまいらせる心は、いはゞ人間感情の自然である。一方過去の、薫や匂の思い出されるのも、

母や乳母が恋しいのも、自然に起つて来る人間らしい感情で、それが、仏に向う心と背反する性質を持つものとしては、いささかも彼女に感じられていない。

「君にぞ感うとのたまひし人は、心憂しと思ひ果てにたれど、なほその折などのことは忘れず。

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき。」〔手習〕

「下腐の尼のすこし若きがある、召し出でて花を折らすれば、かごとがましく散るに、いとどにほひ来れば、袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの」〔手習〕

作者はこういう浮舟に、仏道に志しながら時に官能に揺り動かされる、人間存在の狀態を、示めそうとしているのではない。描かれているのは、静かな精神の界である。それは生理とはまた別の秩序に支配される。これらの場面は、作者の想像力の所産である独得の精神的分野について、作者が読者に訴えているのだ。

「この本意のことし給ひてのちより、すこしはればしうなりて、尼君とはかなくたはぶれもしかはし、碁打ちなどしてぞあかしくらし給ふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり、こと法文なども、いと多く誦み給ふ。雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ、げに思ひやるかたなかりける」(同上)

求道心と人間の自然性との未分の心象風景を描き出しているのである。この特殊な秩序世界こそ作者の打ち出して来たところ、「手習」の巻の一つの焦点である。

同じ境地が僧都にも見られる。もとより精神的內容の高さやきびしさでは浮舟は比べものにならないが。

「『……このあらむ命は、葉の薄きが如し』と云ひ知らせて、『松門に曉到りて月徘徊す』と、法師なれど、いと由々しくはづかしげなるさまにてのたまふことどもを、思ふやうにも云ひ聞かせ給ふかな、と聞き居たり。今日は、ひねもすに吹く風の音も心細きに、おはしたる人も、『あはれ山伏は、かかる日にぞねは泣かるなるかし』と云うを聞きて、われも今は山伏ぞかし、ことわりにとまらぬ涙なりけり、と思ひつつ、……」

〔手習〕

浮舟は僧都の言動に一層敬虔な尊敬を覚え、同時に自身の内部深くに共感する琴線を感じる。僧都から母老尼

手習・夢ノ浮橋私見

は「念仏よりほかのあだわざなせそ」と音楽に遊ぶのを禁められているから、彼自身がこういう態度の修業生活を提唱しているのではない。あくまで浮舟の場合の特殊と見るべきである。

さて、山里にこもつて経を誦み勤行にいそしみ、時に述懐を手習いに托している、浮舟を描くことによつて、作者が、全く新しい型の出離者を創造していることに注目しよう。作者は、好意以上の一種憧憬的な感情を底にひめた筆致で、帰依者の最良の姿を、浮舟に於いて描き出しているかの如くである。作者の尋ねる聖地は、観念的教理論や、分析や、反省や、一切の煩瑣な思弁を遠く引離れた、若い女の心の内部にあつた。絶望的な孤独感が、「形代」に過ぎなかつた浮舟を、いつしか「個」の生活にまで高めていつたのだつた。持ち前のおほかさが、今は仏に向う集中力を扶ける。彼女が人が變つたように自己主張を貫いたり、閉鎖的態度をとつたりするのは、いつも厭離穢土のため、具体的には、京の世界を離脱する方向を保つ必要上の自衛手段で、本質の人となりは變ることなく、仏にも人にも柔らかに若やかに、おほかである。孤独な一人の女が「個」に目醒めながら生きる、単一で純粹な信仰の姿が美しく描かれて行く。作者は人間の精神活動の内の、人間的な面と宗教的な面とが互に一方が他方を拒否することを必要としないという見解の上に立つかの如く、幾つかの美しい場面を描いている。宗教界の嚴肅主義的な人間性否認が否認されているのである。浮舟が手習いをするのを、「母のみ恋し」と思うのを、作者はむしろ彼女の心情の美しさ、若い女のやさしさとして把えている。この清浄境では、罪障恐怖感を離れ得ぬ人達の方が、観念的罪業の垢に薄汚れて見えるかの如くである。藤壺・朱雀院・女三宮・光る源氏・八ノ宮等、それに最初から僧又は尼として登場する人々まで加えて、源氏物語には多くの出家が見られるが、浮舟のような出家のタイプは初めて現れたものである。作者はここに虚構の形で、信教の新しい秩序と、全く新鮮な出離の型を創作したのである。紫式部日記に見る式部の内的不安・内的憂悶を産んだものと同質の精神が、この形象を産んだのであろうか。ともあれここに、ひとり源氏物語の上に限らず、地上にそれまで未だかつて存在しなかつたような新しい出世間者の姿勢を作者が創り出したことを認めたい。浮舟を、古註は「手習」の巻の半ば以後「手習ノ君」と呼びならわしている。「手習」以後の彼女が、特に中世の人々から、共感を以つて享

け入れたのであろう。そこに又われわれは、こういう境地を描き出した作者の中に、中世的なものへの予見、乃至は傾斜がひそんでいるのを見るものである。

浮舟物語の女主人公としての彼女の身の成り行きは、上記のところ（「手習」）で、一つの完成の形を成しているかの如くである。もつとも、破壊しようとする力が外部から加われれば、一たまりもない性質——女の身の上だという——を含んでいることは、既に見て来たところであるが。「夢ノ浮橋」の巻の後に物語の展開が見られるとすれば、浮舟の至り得たこの境地と、来者との間の葛藤もしくは交渉と、帰結とが想像されるところである。

作者は、薫だけを、蘇生した浮舟に結びつける方向に、手際よく筋をきめて行く。浮舟の死を伝えられた匂は、悲歎のあまり病に陥つたが、やがて、以前と同じ様な遊戲的恋愛の世界に立ち戻る。中の君との家庭も、円満に過ぎて行く。こうして「蜻蛉」の巻後半以後、匂は浮舟をめぐる三角形の一角の位置から離れてしまう。一方薫は、浮舟の法要を営み遺族を顧み、今は「いふかひなきことと思ひ」つゝも忘れ難く思っている。この噂は小野の浮舟にも聞える。これより先、女一宮が病氣にかゝり、祈願の為に宮中に招かれた横川ノ僧都は、明石ノ中宮に、問わず語りに浮舟発見の事情を語る。中宮は、これを薫に知らせる様に、薫の愛人小宰相に依頼する。浮舟の生存と出家を告げ知らされた薫は、今も匂が介在しているのなら、自分は身を退こうと考える。薫は、中宮に対面して、その意向を確認する。中宮は、匂が過失から遠ざかることを望んでいる。薫は、浮舟を訪ねようと思ひ、先ず僧都に就いて事実を確認し、浮舟の庵への案内を依頼する。僧都は薫を浮舟に引あわすための下山をば、きつぱりと拒絶する。ここに上に掲げた僧都の文が加わる。

僧都に断られて薫は、浮舟のもとへ小君を遣すからしるべの文をと、再三懇請する。僧都は浮舟への文を書いて小君に托した。ここで

1、浮舟が出家して後、薫はその生存を知らされる。

2、薫と浮舟の交渉の、再開の頭に、横川ノ僧都の文が置かれる。

手習・夢ノ浮舟私見

右の二つの時点が注目される。いずれも、作中人物が偶然に招いたものでなく、作者が計算の上で、設定したものであることは論をまつまでもない。

僧都の文の内容は、前半は、浮舟が薫の同意を得ずに出家したことを、叱るものであり、後半は、今後の浮舟の、踏むべき道を、指示するものである。

僧都の文に云う、「仏の責め」は吉沢義則博士は、その著書、「源氏随攷」に、湖月抄師説と、三光院説とを比較して、後者をとっている。前者、箕形如庵の説は、「聊爾なる事により後悔あれば、仏のおしへにもそむくべしと也。」後者、三光院三条西実条の説は、「薫の熱心をとめたる情なく背きたる事をかくいへり。かへりて罪とならんとなり。」と云うものであるが、吉沢博士は、「愛執の罪をはるかし聞え給ひて」と、下にあるから、「出家によつて薫に愛執の念を増長させることになる。それでは尊かるべき出家も却つて罪になる」と解する、三光院説に従っているので、私も、この説に賛成である。博士は「愛執の罪を晴かし聞え給ひて」は、中止形で、下に「契らせ給ひ」を略した形と、述べている。吉沢博士の「契らせ給ひ」とは、浮舟が還俗して、薫と再び俗世の夫婦の縁を結ぶ、という意味である。この「もとの御契あやまち給はで」を、多屋頼俊氏は上に見た如く、「もと夫婦であつたその因縁お捨てないで」（「源氏物語の思想」の内「宇治十帖の結末」）の意とし、池田亀鑑氏は日本古典全書「源氏物語」七の頭註に、「普通り夫婦の御縁をお結びになり」と訳し、日本文学大系山岸徳平氏校注「源氏物語」五の頭註は、「以前の夫婦の縁を御間違いなさらずに（還俗して）、もとの夫婦となり」と訳して居る。秋山虔氏は「以前の夫婦の御縁にそむかないで還俗し」（『岩波新書「源氏物語」』、高橋和夫は「薫と夫婦の縁を結び」（『源氏物語の主題と構想』）とする。還俗を指示したと見るのが多数で殆ど定説化したかの観があるが、「夫婦の旧縁に立ち帰る」こと、即ち「還俗」と解してしまうのは、あまりに飛躍的で、私には承服し難い。必らずしも還俗とは限るまい。

多屋頼俊氏は、還俗説に反対して「もと夫婦であつたその因縁お捨てないで、その因縁に従つて」（「宇治十

帖の結末」と訳し、門前真一氏は、「契り」という語は、広く前世からの宿縁をさすもので、ひとり夫婦の縁のみを指すものでない、と多くの例証をあげて、「還俗説もその否定説も『もとの御契り』を、浮舟の出家以前の、薫との夫婦関係と解している。(略) わたくしは『もとの御契り』は浮舟が、横川の僧都といふ善知識に値遇して出家した因縁をさすと考へる。」「(源氏物語新見)」と云つて非還俗説をとつてゐる。

私は、「もとの御契り」は従来の諸説通り、薫との旧縁と見たい。その根拠は、「あやまち給はず。」という語の、解釈にある。僧都は、この文の前半で浮舟を叱つて、「御ところざし深かりける御中を、背き給ひて、あやしき山がつの中に、出家し給へること。」と、云つてゐる。又、上にも見た通り、尼君宛ての書簡中の、浮舟への伝言の部分でも、浮舟が身分を明かさずに出家したことを、なじつてゐる。彼女が、出家に當つて、薫とのつながりを無視したかの如くであつた点を、僧都は、浮舟の「あやまち」としてゐるのである。有夫の女性が、出家を決断するには、夫の同意を経るべきであつた。紫の上が、しばしば出家を願つたが、光る源氏は遂に許さなかつたのを、われ／＼は見て来た。僧都は、別途に、自身の輕卒をも認めてゐるが、今は師として、弟子を訓戒する立て前で、云つてゐるのである。出家という尊いわざは、敬虔に慎重に、遂げられるべきで、目的が純粹であることを要するのは論をまたないが、手段にもまた欠ける所があつては、仏に對して非礼である。というのが、僧都の見解であろう。妻の「出家」の因子に、夫への背信が含まれてはならない。又、夫は妻の「この世に亡き人と同じやうに」なるのを愛惜する情を残してはならない。それでは仏を冒瀆することになる。浮舟のこの度の出家のしかたでは、「仏の責め」が、浮舟に加わるのである。又、薫は愛執の「罪」を仏に負うことになる。「愛執の罪を晴かし」を多屋氏は、「愛欲の迷雲お払い除けて本然の真理お現わす」(「源氏物語の思想」の内宇治十帖の結末)の意としてゐる。私は「もとの御契りあやまち給はず、愛執の罪を晴かし聞え給ひて」は、「薫君との、出家以前からのご縁を踏み外さず、もとの夫婦の立場に戻つて、更めて出家の許しを願ひ、尼になつた浮舟に今なお薫が残している執心(それは薫の罪障となる)を綺麗にとり除いて、出家を快諾しておもらいなさつて」と解したのである。「もとの夫婦の立場に戻つて」と訳したのは、前世からの因縁によつて

手習・夢ノ浮橋私見

結ばれた、夫婦といふ結合が、仏の目から見れば、まだ解けていないから、浮舟が自分の一存で、一方的に身分を更えたりせず、の意で、「俗世の夫婦の間柄に復する様に」というのではない。僧都は、浮舟の飛躍によるあやまちの部分を埋める様に指示しているものと、私は解するのである。僧都は、還俗を勧告するのではない。しかし、浮舟が現在のまゝの形で、出家生活を続けることは、許さない。元の身分に復して、更めて薫の許諾を得て、浮舟は出直さなければならない、と僧都は指示するのである。作者は、「帚木」の巻で、軽卒に出家したことを悔いながらの、未練半可な尼僧生活を、批難している。「紫式部日記」には、作者自身が、一旦出家した以上は、後戻りも停滯も出来ないから、安易な気持で、十分な用意もなしに思い立つべきでない、と考える記事が見られる。それは在家主義ではない。出家修道を、尊貴な、それ故嚴肅慎重に、体制を整えてから、志すべきものとする見解である。私の解するところでは、僧都の浮舟に与えた意見は、以上に見る出家観と矛盾しないものである。ここに「紫式部日記」を引き合いに出したのは、宇治十帖が追究しようとするものと、日記に見える作者の述懐との間に、思想上の連関性が、濃厚に認められるからである。

さて、この所で私が非還俗勧告説をとるのは「あやまち給はで」の、解釈にもとづくものであるが、僧都が、薫の来訪によつて、浮舟の身の上の知つて、驚き、浮舟に迷いの生じるのを懼れ、薫の下山懇請を拒絶している態度によつても、亦裏づけを得ると思うのである。

「一日の出家の功德は、はかりなきものなれば、なほ頼ませ給へ」は吉沢氏は、「対校源氏物語新釈」巻六の頭註に、心地観經の句を「河海抄」によつて引き、「只一日の出家でもその功德は無量ですから」「還俗して薫と夫婦になられても、一旦出家した功德は滅びるものではありませんから、安心なさい。」と訳し、「源氏随攷」では、「余世を出家で送るといふやうな考はすてゝ、一日出家といふ建前で出家するといふ事にしませう。一日出家は心地観經に『若善男子善女人、発阿耨多羅三藐三菩提心、一日一夜出家修道、二百萬劫不墮惡趣』とあるやうに功德無量のものだから、一日出家でもなほ仏の功德を信じなさい。」と解している。池田亀鑑氏は、「唯一日でも出家の功德は測り知れぬものですから」「やはりそれを力になさるやうにと存じます」（上掲「源

氏物語」七、頭註)、山岸徳平氏は、「只の一日だけ出家した功德でも、無量無辺なものである。(還俗して薫と夫婦になつても、出家の功德は消えるものではない)から、還俗してもやつぱり、出家の功德を力になされよ。」(上掲「源氏物語」五、頭註)と、いずれも心地観經の句を記載して云つてゐる。秋山氏は「たゞ一日だけの出家でも、功德は測り知れぬものだから、やはりそのことを力になされよ。」(上掲「源氏物語」と、池田氏説に近似している。門前氏は、「還俗説では僧都は、還俗を勧告するためにこの經文を引用したことになつてゐる。もし還俗を勧告するのでなかつたら、これを引用する必要がないかとまでに考へられてゐる。果してさうであらうか。(中略)ここで僧都の經文の引用の爲方が問題になる。心地観經はいはゆる四恩を説いた經典として有名である。しかし、この經典の一部の本旨は、出家による修道生活のすぐれた価値を強調したものである。そして『一日出家の功德は……』の本文がある。その厭捨品才三は冒頭に唯摩經よりの引用があるが、それは唯摩經の在家主義を否定するためのものである。問題の本文の典拠「一日一夜出家修道二百萬劫不墮惡趣」は、その末尾にある出家生活讚歎の語である。僧都は、いはゆる断章取義、經典の本文を無視して片言隻句を都合の好いやうに曲解して引用するであらうか。神聖な經文を前後を切つて部分的に引用し、その本旨を自分勝手に曲げてしまふやうな爲方は罪とされている。作者は學徳兼備の高僧に、出家生活礼讃の經文を、反対に還俗を勧めるために引用させるであらうか。わたくしはさうは考えない」と述べて、「一日出家の功德さへこの様に大きい。この貴い恵れた出家生活を決して捨ててはなりません。さらにたゆまない修道をつづけなさい。」という勧告と解し、「なはたのませ給へについては、「還俗説では、還俗しても失望することなく、世俗の夫婦生活の中にあつて、救ひをたのみにせよといふことに、還俗否定説では、やはり元通り修行につとめて仏の救ひをたのみにせよといふことになる。」(「源氏物語新見」と、還俗否定説に立つて、述べてゐる。多屋頼俊氏が、「宇治十帖の結末」で説く通り、僧都が仏を相手に算盤勘定をする筈はなく、門前氏の説の通り、出家礼讃の經文を引用して、在家主義容認の根拠とする訳もない。物語のこれまでに示す所では、僧都は、自身真劍に出家修道の生活を実践し、戒律を細部に至るまで周到に守つてゐる。これを見ても明かに出家主義の側に立つ人である。

手習・夢ノ浮橋私見

この経文が、在家主義に對立する意味での出家主義を、肯定した上で引用されていることも、亦自明である。しかし、この場合は苦境にある浮舟を慰め励ます為の言葉として、「その様に尊い出家だから、今後も続けるがよい」と云つたと、解し得ると同時に、「その様に尊い出家だから、もし、こゝで、出家の志を奪われることがあつても、悪趣に墮ちることはない」と一旦肯定してから更めて逆説的に述べたとも、兩様に解し得るところである。たゞ後者の場合でも、僧都は、還俗を勧告したことにはならないと私は見る。浮舟が、窮極的には薫から出家の許しを得るとしても多少の困難はあるだろう。従つて容認に至るまでに若干の時日を要するかも知れない。薫も、浮舟の周辺も、浮舟自身すら、反覆常なき「人間」というものであることを、われわれは物語の上に既に十分に見て来た。不慮の事態が起り得ないという保証はない。僧都は、人間というものの、尊さ云うかひなさつとを、知悉している如くである。この引用句が、兩様に解される所以である。

然し、ここに、僧都が浮舟を、薫の「輕々しくは思されざりける人」と知つた時の、懼れを思い出したい。「(薫が)いとあはれと思ひ給へれば、かたちをかへ、世を背きにきと覺えたれど、髮鬚を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身はいかがあらむ、いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかなと、あぢきなく心みだれぬ。」〔手習〕

浮舟が今薫に逢つて、迷いが生じたら、罪障を作ることになると、僧都ほどの高僧が、心乱れるのであつた。この文は、その乱れた心が静まり、強い指導力が今、浮舟に与えられねばならない、と判断したところから、小君に托されたものと私は見る。僧都は、最初、薫に下山して浮舟の許に案内する様にと頼まれた時、言を托して断つた。才二回には、小君を使者に立てるから、しるべの文を、と請われて、それすら、僧都自身破戒の罪になるから、と強い言葉で拒絶した。才三回目に、薫から才二回目と同じ内容の懇請を受けて、認めて小君に渡したのがこの文である。この急変は、岷江入楚の箋に「薫の好色ならぬ所を聞定めて僧都の文遣はしたる心尤もおもしろし。」と云うのを始めとし、僧都が、薫の弁明——恋愛でなく、浮舟の母の歎きがいとほしい故だ、自分は昔から強い道心を持つてゐるものだ、と訴えたのを信じたのによると解する説が、広く行われて居るが、私は、

僧都の氣持が變化したと思わない。僧都の仲介の依頼を拒む決意は、戒律によるものだから、才二回目と才三回目との間に、氣持の變化は起つて居ないと見るものである。文を認めたのは、薰の依頼とは無關係な、全く別の目的、緊急事態にある弟子浮舟に手をかす為の、自身の必要から、浮舟への文を小君の幸便に托したもの、と見るのである。この点は次によつても明かであると思われる。

1、僧都は自分の側に生じた、浮舟に關係ある事件として、薰の來訪を知らせている。

2、文の内容は、僧都の浮舟に対する、卒直な戒告に終始し、薰の依頼した文言は、書かれていない。

3、文末に小君を紹介しているが、薰を紹介する言葉は無い。

僧都の文の書かれたタイミングは、内容と同じ位重要な意味を持つ。それは作者が、浮舟の出家生活の破壊されるのを阻む意図を持っていたことを、証すものだと私は理解する。僧都は、右の文が浮舟に届いたかと、念を入れて、翌朝尼君に手紙で伝言を依頼している。それ程急を要する重大事なのである。僧都は、薰の出現によつて、浮舟が罪を犯すことのない様にと、恐れ、あはれみ、懸命に配慮してこの文を認めている。そこには情趣的許容の入る余地がないのを、見落すことは出来ない。私は、僧都がこの時、文を急いだ点に、浮舟の出家が挫折するのを何とかくい止めようとしている努力を見る。「一日の出家の功德云々」の句は經文を引用して出家の功德を強調し、危急の場にいる弟子の道心をげますものと見たい。「なほ頼ませ給へ」は多屋氏、門前氏の説の通り、「仏を」頼みになさいの意である。諸説が、多く、「出家の功德を頼みになさい」の意にとつているが、出家を、「三宝の喜び給ふ」のは、衆生済度を願う慈悲心からである。出家修道は人間が成道の為に最短距離を選ぶ信仰上の手段であろう。仏に私恩を売つたり、功を言い立てたり、自分の積んだ功德を頼みにするような外ずれなことを、学徳兼備の高僧が弟子に教える筈はない。僧都が見て浮舟の頼みとするべき目標は、仏以外にない。特に、今の場合は浮舟自身が、一心に仏の冥護を願う以外に道はないのである。作者は弱小なものに、それ故に注がれる仏の大慈悲、仏が信者と一対一の關係に降り立つて手を差しのべる愛に、思い至つているのだろうか。横川ノ僧都は源信をモデルに持つと云われている。八宮が師事した宇治の阿闍梨の嚴肅な自力主義と比べ

手習・夢ノ浮橋私見

れば、作者は横川ノ僧都に、作者の想像する、仏教思想と仏教者の理想を、描き出す意図を有つていたのであろうか。天台仏教的戒律尊重と、他力的敬虔の萌芽とがこの文に不思議な信仰的調和を完成している。浮舟は、僧都の言葉の意味は、直ちに理解した。しかし、仏の信仰と関連した真の意味をまだ知らない。

「……この僧都のたまへる人などには、さらに知られたてまつらじ、とこそ思ひ侍れ。かまへて、ひがごとなりけり、と聞えなして、もてかくし給へ。」（夢ノ浮橋）

と、浮舟はここには居ないことにして、どうか隠くまつてほしいと、尼君に懇願するのみである。僧都は、文で指示した方針の説明を、浮舟に直接会つた上でする、と書き添えている。

高橋和夫氏は、僧都の文を、浮舟に還俗して薫の妻になれと勧めるものと解し、之を横川ノ僧都の新仏教と見、「もし、作者が彼女を尼のままでおく構想であつたとしたならば、僧都の手紙の意味はなくなってしまう。私は浮舟の心境よりも僧都の手紙を重視したい。」（源氏物語の主題と構想）と云つてゐる。私は、僧都が、浮舟の出家が挫折を見ない様にと希求し、また旧来の天台仏教的戒律に強く支配されていると見て、なお、僧都の手紙に、高橋氏のとは異つた思想のものにはなるが、構想上重大な意味を認めるものである。そして又、浮舟の心境よりも僧都の手紙を重視するものである。小君のもたらした僧都の文は、上に見た通り、浮舟ひとりを対象にして認められたものであつた。然し、作者がこの手紙を持ち出したのは、薫の課題にとりかかる為であつたと私は考える。

薫は俗物的根性の持ち主だと諸家に評されている。大君と結婚すれば、弁の尼の口をふさぐことが出来て、自分の出生の秘密が世間に洩れずに済むと打算したり、出家した浮舟に、男があるのでないかと疑つたりするあたり、俗物と見られても致し方あるまい。然し、この二点については、彼の、出生の秘密を負つてゐることから生じた、心の深傷が作用していると見れば、むしろ彼は同情されるべきなのだろう。けれども、問題はそれだけ

でない。彼が横川ノ僧都に、浮舟の許にしろべの文をほしいと頼むについて、云つた言葉をながめて見よう。

「ここには、俗のかたちにて、今まで過すなむいとあやしき。いはけなかりしより、思ふ志深く侍るを、三条の宮の心細げにて、たのもしげなき身ひとつをよすがに思したるが、さがりがたきほどに覚え侍りて、かかづらひ侍りつる程に、おのづから位などいふことも高くなり、身のおきても心にながたきことにつけてこそさま侍過ぎ侍るには、またえさらぬことも、数のみ添ひつは過せど、公私に、のがれがたきことにつけてこそさま侍らめ、さらでは、仏の制し給ふ方のことを、わづかにも聞き及ばむことは、いかであやまたじ、とつつしみて、心のうちは聖におとり侍らぬものを、ましていとはかなきことにつけてしも、重き罪得べきことは、なにとてか思ひ給へむ。さらにあるまじきことに侍り。疑ひ思すまじ。」（夢ノ浮橋）

これは薫の略歴書とも云えそうだ。彼は幼時から出家を望んでいたもので、元服には抵抗を感じた。元服すると、官位が待っていた。十四才四位侍従、十六才右近中将、十九才三位宰相中将、二十三才中納言、二十六才権大納言兼右大将。家庭の面では、母三条の宮は早くから薫を却つて親の様に頼みとしている。二十六才で今上の女二宮と結婚。出家の志はありながら、公私とも次才に責任が加わり、勝手に身動きが出来ない。「然し、心中は聖僧に劣らないつもりだ。お疑い下さるな。」と云う。薫の主観に従えば、僧都に対つて偽を云う気持ちはないだろう。けれども、そういう口の下から浮舟への紹介状を懇請する。僧都を訪ねた帰途は小野の庵に立ち寄り予定でいる。立ち寄らなかつたのは、世間体を慮つた結果だ。慎重な行動、熟慮、反省、渝らぬ誠実、それらも皆この人にあつては世のおぼえを大切にしようとする方向に結論が見出される。一般に貴族とはそういうものであるが。だからといつて、薫の「俗物性」は蔽われない。

宇治十帖に登場する主要人物は、薫を除いて、それぞれその人の才一義に生きる。句でさえ、狂熱的な恋に生死を賭けている点で、薫に比べると純粹に生きていると云える。薫は実父母の罪過による出生という秘密を負つて、絶えずそれを気にしながら、いつしか、口に云う道心とは背馳する方向に、歩み進んで行く。彼が主観的に自身をどう思つていようと、自らの限界状況を認めて而かもぬくぬくと安坐しているうちは、僧都や浮舟のよう

手習・夢ノ浮橋私見

に、生死の竿頭に生きる真摯な人間とは見えない。

薫は、この物語とは次元を異にする、貴公子物語の主人公に仕立てたら、彼は光る源氏に亜ぐ寵児になり得るもろもろの特性を、具備している。また、現実の生活の面では、彼は、朝にあつては能吏であり、内に於いては良き家庭人である。仏に對する負い目を知り、道心を有つ人。戒律に耐える能力を備えながら、而かも繊細な人間的感情を棄てられない人。系類と、公的地位上の責任にしばられて、個として生きることの出来ない人。と見て来ると、彼は一人の善良な貴族である。だがその貴族的、常識人的なところが、彼を「俗物」にするのである。宇治十帖の中に入れたから彼は不協和音的なのである。そこに宇治十帖の世界の特殊な秩序を見ることが出来るのだ。やがて東宮は天皇になり、匂宮は東宮に、夕霧は太政大臣に、鬘黒は左大臣に、薫は右大臣に進むだろう。明石中宮、匂宮、女一宮を含む天皇一家も、光る源氏の家系も、藤氏の家系もいよく栄え、すべて、この光る源氏の御族の幸福と榮耀は永く保たれるだろう。薫を含めて宇治十帖の中心人物は、その普遍の榮光の一隅の、離脱を志した人々である。作者の特殊な価値観を試みられた界の、住人である。

「夢ノ浮橋」の後に新しく展開する部分が残されているとしたら、それは薫を中心人物に据えるものであろう。浮舟の境地はすでに見たところ。僧都の思想と人間像も上掲の手紙に於いて完成した。浮舟は出家を続ける為に、薫の許しをどうしても得なければならぬ。僧都を甘く見、男があるのだろうくらいに女を甘く見ていた薫は、不意を衝かれて、驚きを幾倍かに感じることに思われる。その驚愕の中には、女にしてやられたということと以上の、深刻な自省が当然含まれているであろう。彼は、既に心中の「愛執の罪」を、僧都に見抜かれている。また、読者は、久しい間の彼の「誠実さ」が、実は俗物性に過ぎないのを見て来た。僧都の文は、新たなきびしい課題を投入した。而かもそれは、薫によつて解決せられるべき性質を、のぞかせている。道心と愛執の問題、人は先ず才一義に於いて真摯であるべきだという問題を、作者が真向から打ち出して来たからである。最初才三部が書き始められた時、やがて宇治十帖に踏み入った時、物語の中心主題は、薫の道心とその成り行きにあ

つた。彼が、恋と俗世のつとめの間をさまよっている間、作者も、薫の道心の問題は、忘れ去ったかに見えた。大君の死後、久しく物語の圈外に放置されて来た最初の課題が、僧都の文によつて、再び、中心興味の位置を占めることになりそうである。薫と浮舟が、「夢ノ浮橋」の後に、どういふ交渉を持つか、結果はどうなるか、それらは具体的には一切不明である。然し、どんな形にしろ、この度は、課題が解決されるか、解決の暗示を与えられるかすることは、予想に難くない。そして、そのことが、遠く橋姫以来の筋運びを、才三部起筆以来のそれを、大観的に統括することも、亦推測されるところである。僧都の文は、その予測を許すだけの、思想の重量を抱かえて、これ亦、作者によつて計算されたタイミングに、打ち出されたのだ。僧都の人間味の重厚さが、作者の鋭利な冷酷な作家的手腕を、逆に、人間愛的な熱意に見せるところである。

僧都が、薫の歎心を迎える為に、浮舟を京に送り返す様な安易な解決方法をとる人物でないことは、薫の要請をこたわつた言葉で、十分推察出来る。彼がかつて世評よりも人命救助が優先すると判断したのを、われわれは見た。彼が名利を捨てて、修道に専念する聖僧であることを、作者はくり返えし書いてゐる。僧都が浮舟に急いで指針を示したのは、ひたすら、弟子が道を成就するようにと願う、師としての配慮と見てよい。浮舟は、薫によつて京に迎え取られるかも知れない。然し、僧都はその前に下山して、約束通り浮舟のとるべき道について指導するであらう。作者は、僧都を描くことによつて、「手習」の巻以降に、勁い新しい価値観の世界を樹立している。僧都は、浮舟を再生させ、変貌させ、薫と再会の端緒を開き、物語の筋を進める役割を果たしたが、ここでは、作者が「聖」を創造した思想的な意義を、筋の上に作用させていると見るのである。その故に、僧都の文は、「夢ノ浮橋」の巻のハイライトとなるのである。浮舟が、彼の教えに忠実に随うであらうことは、十分に考えられる。ここに作者の賭けが設けられるのではなかつたらうか。

薫に機会が来る。も早や、戒律を守るのに、自力を頼みとすることの出来なくなつた浮舟は、単一に仏の顧みのみを祈り求めるにちがいない。彼女は、出家生活自体が信仰の目的ではなく、阿弥陀仏への信頼と敬虔のため

手習・夢ノ浮橋私見

であることを、體驗的に知っているだろう。僧都の啓示に、新しい意味を考えるならば、私は以上の様に、還俗許可とは、全く逆の方向に、目を注ぎたい。視線を作者の描き出す世界像に従わせたままである。浮舟は出家の許しを薫に願うであろう。「総角」の巻で、大君は死の床で、もしこのまゝ死ねなかつたら、薫の求婚を斥ける方法がないから尼になろう、とひそかに決意していた。浮舟は、かつて大君が心の中に望んでいたことを、実現する立場に立つ。作者が、浮舟を出家後に薫に引き合わせ、薫と浮舟の交渉再開の頭に僧都の意見を持ち込んだことから、薫に対する浮舟の、新しい形でなされる結婚拒否を見ようと構想していたと、私は想像するのだ。これは最初の主題の変奏主題である。そして浮舟はさぞ美しく、その場面はさぞ新しい敬虔の色で彩られるものになる筈だつたのだらうと想うのである。薫は仏に対して、浮舟の所有を主張することはあるまいが、道心と愛執の岐路には立たされる。再び宇治十帖の始めの地位に戻つて自己と対決することになるのだ。上來見て来た薫の人間像は、作者によつて設定されたものである。ここで彼が、自己を超克するか。

彼に仏道を真剣に考える機会がいよいよ到来するとしても、彼が特別に彼のために手を伸ばしてくれる仏と、一対一で対きあう機会を捉えることが出来るか。若し、それが出来たら才二部以来の宿世の業、薫の出生の因となつた不幸な過誤のしこりが、新しいライトをうける端緒となりそうだが。彼が、彼自身の壁を突き破つて、そこで出家するか、またはどういう道を選ぶか。私にはわからない。私が知つたのは、大君が、中ノ君が、浮舟が、作者の分身であつたように、いや、もつとそれ以上緊密に、薫は作者の分身であつたことだ。

×

私がかねがね「夢ノ浮橋」という巻名は「未完」を意味するのではなからうかと考えている。それは本居宣長翁の用語を借ると「残り多くて見はてずさめぬる夢」のころ、この物語が何らかの事情によつて未完に終つたことと、そのことがまことに残り惜しく思われるという意とを象徴的に表現した巻名なのでなからうか。本居翁の説に立ち戻つて見ると、翁は「此巻の名はふるき抄どもには云はれたるごとく此物語のすべてにわたるべき名也。但しうちまかせてすべての名といはむはたがふべし。ただ作り主の下の心にぞ其意ばへはふくめたるべき。

そもそも此物語はまさしく世に有りし事のごと書きたれども、みなつくりものがたりにて、光源氏ノ君といひし人をはじめ、何も何もことごとく夢に見えたりし事のごとくなるを、殊にはてなる此巻のとちめのやうにまことに残り多くて見はてずさめぬる夢の如くにぞ有りける。(中略)これはたゞ此物語に書きたる事どもをみな夢ぞといふ意にこそあれ、世の中を夢ぞとをしへたるにはあらざるをや」(玉の小櫛)と云つてゐる。これは「夢ノ浮橋」で全篇が完了したものとして、最後の巻につけたその名の如く源氏物語全篇が亦美しい虚構だといふのである。翁は古註のすべてが説いてゐる仏教的解釈を排除しつつも、その中の、この巻名は全篇にわたるという見解は肯定し、古註の仏教的享受とは別に、そこに文学的な美的憧憬を感じ取つてゐる。流石にまた「世の中は夢のわたりの浮橋かうち渡りつつ物をこそ思へ」という古哥などに惹かれずに「夢の浮橋」といふ言葉のひびきを直かに把らえている。これらの卓見に敬服しつつ、巻名の意味に関しては、私は「はてなる此巻のとちめ」それ自体が「見はてずさめぬる夢」のようだ、即ちこの物語が未完であることと見果てぬ美しい物語になほも名残りが惜しまれるという意味とを見たいのである。源氏物語五十四帖の中、最後のこの巻の名のみが、「巻中の哥にもよらず詞にもつか」(紫明抄)ず事件にも由らぬ理由は、上記の如く物語の未完のままの擱筆の意味に解すると、最も自然に納得されるのではなからうか。